（銀のエンジェル賞　中学生の部）

僕はあの日を今日と呼ぶ

中一・仲田　琉生

ジリリンジリリンとうるさい目覚ましが鳴り響く。また一日がやってきた。あくびを一つ大きくして僕は目覚める。また始まった一日だ。これでもう何回目なんだよ。

僕は里原連。どこにでもいる普通な中学一年生だが、今は普通じゃない。あれが起きてからは…

あれはたしか一ヵ月前、いや…今日の七月二十日。この日に一学期が終わった。これでしばらくの間はいつもいじめている三村や井上と会わなくてすむし、何より一日中のんびりして学校に行かなくてもいいんだ。しかし、一つ問題があった。「宿題」だ。この二文字を聞くだけで僕はふらついた。九科目も宿題があるなんて夏休み中で終わるか不安だったし、それなら学校があるほうがマシだと思った。一学期最後の帰り道。僕は友達の田岡と二人で帰った。田岡はいじめられていた僕を助けてくれたとてもいい友達だ。その田岡と

「宿題の量、すごい量だな。」

「こんなに量があるなら夏休みが永遠にこなかったらいいのにな ー。」

なんて話しながら歩いていた。でもこれがきっかけで始まったのだ。家に帰ると夜ご飯と書き置きがテーブルの上にあった。母の書き置きだ。母は朝早くから深夜まで働いているから、夜ご飯はいつも一人だ。母の「レンジで温めてから食べて下さい。」と書いてあるように僕はレンジで温めて夜ご飯を食べた。父は出張でしばらく会って

いない。父と母の三人でご飯を食べたのは幼いころしか記おくにないからいつもさびしかった。そう考えている内にもう夜の十時を時計が差した。僕は明日から夏休みだし目覚ましをかけずに布団に入って寝た。

うるさい目覚ましに起こされずに僕は気持ちよく朝をむかえた。とてもいい朝だ。体をのばして目に入ったカレンダーを見た。

「えっ…七月二十日？」

昨日終わったはずの七月二十日になっていた。僕のカレンダーは日めくりだしめくり忘れだと思って安心したのも束の間だった。田岡から一通のメールが来ていた。「今日、終業式なのに来ないのか。」と通知が来ていた。僕は急いで制服に着替えて外に飛び出し、自転車のペダルを思いっきりこいだ。こいでいる間に物事を整理しよう。昨日終わったはずの一日がゲームのように同じ一日をくり返している。意味が分からない。そんな小説のようなこと起こる訳ないだろ！これは夢かなんかなのか？　そう思ってつねっても痛いし夢じゃなかった。もちろん学校も遅刻した。担任の先生にこっぴどくしかられ、三村にも馬鹿にされた。はずかしいし悔しい。

「大丈夫か？」

と田岡が声をかけてくれた。僕は小さくコクンとうなずいた。一学期最後の授業（？）を受けたが、昨日というか今日というか授業内容がまったく同じだったが、ノートには何も書いていなかった。数学の岡本先生の授業の内容も覚えていたし、その日に井上が怒られていたのも全く同じだった。そんな感じですべて同じだった。田岡との帰り道でも、

「宿題の量、すごい量だな。」

と言われた。全く同じだ。

「そっ…そうだよな。」
と僕は言った。これで七月二十一日が来るだろう。そう思った。家には当たり前のように夜ご飯と書き置きがあった。「レンジで温めてから食べて下さい。」と書いてあった。夜ご飯も昨日（？）と全く同じだった。僕は寝る前にカレンダーを七月二十一日にめくった。一応目覚ましもかけてから寝た。
　ジリリンジリリンと目覚ましが鳴った。僕はすぐ目が覚めた。急いでカレンダーを確認する。七月二十日だった。昨日めくったはずなのにめくる前になっているみたいだ。とにかく学校に向かった。やっぱり思った通りだった。みんな教室にいる。授業も同じだった。全く同じ帰り道。田岡に相談することにした。
「田岡、なんか変だけど、『宿題の量、すごい量だな。』って言おうとしてる？」
「なんで分かったんだ？　しかも今言おうと思っていたのに。」
「実は何回も七月二十日をくり返していて、今、三回目なんだ。」
「どういうことなんだ？」
「だから、今日を何度もループしているから、今日のことは全て覚えているんだよ。」
「じゃあ里原は七月二十一日になる前に何かしたんじゃないか？」
「それが何をためしてもダメなんだよ。」
「もしかしてこれは夢なんじゃないか？」
「そうであってほしいよ。」
とずっと話していたが、どうすればいいか分からなかった。家に帰ってからも一生懸命考えていたが、やっぱり思いつかなかった。
　それから僕は約一ヵ月の間、全く同じ七月二十日を過ごしていた。もうこのまま一生七月二十日を過ごすんじゃないかと毎日心配で夜

も寝られなかった。毎日田岡とも考え合っているが、明日（？）になれば忘れてしまう。そんな日々を過ごしていた。学校での出来事や話していることはすべて暗記するほどだった。そして僕は一つ考えたことがある。一度深夜まで起きていれば何か分かるんじゃないかと。

さっそく今日の夜は、田岡を家に呼んで夜になるまでゲームをして深夜になるのを待った。もちろん僕が七月二十日をくり返しているのを田岡は知らない。だから詳しいことは伝えてない。だが、田岡が深夜を過ぎて朝になった時にゲームをしていることを覚えていれば、七月二十一日になったことは間違いない。田岡は

「何で急に深夜までゲームしようなんて言いだすんだ？」

と少しとまどっていたけれど、今はそんなことよりも早く深夜を明けて朝にならないかとずっと考えていた。十一時二十一分、田岡がねむたそうに目をこすった。僕も少しねむたいが、がまんして朝をむかえることに集中した。十一時五十一分、もうかなりねむたいがあと少しだ。と自分に何度も言い聞かせた。田岡は半分ねている。十一時五十九分、もうあと一分となった。忘れずに日めくりカレンダーも七月二十一日にめくっておいた。

そして、十二時を時計の針が差した。田岡はねている。急いで田岡を起こして聞いた。

「昨日の夜、ゲームしたのを覚えてるか？」

たった一言だが、これですべてが分かった。田岡から「うん。」と一言が返ってきた。僕は最高にうれしくなった。田岡はぽかんとしていたが、やっと七月二十日を昨日と呼べるようになった。カレンダーも確認した。もちろん七月二十一日になっていた。

この経験で僕は変わった。今まで大嫌いだった宿題も積極的に取

り組み、数日で夏休みの宿題が終わった。いつもなら最後の日までやらなかったのだ。もう二度と一日をくり返すのは嫌だし、夏休みが終わった後も勉強を一生懸命にやった。授業でも手を挙げ続けた。そのおかげでテストはいつも満点、クラスでは代表まで務めた。そんな僕の学校生活は、まるで一日かのように早く過ぎていった。

ジリリンジリリンと目覚ましが鳴り響いている。もうあの時から十年の月日がたった。僕はもう二十二才になっていた。朝早く目覚ましに起こされて僕は職場に向かった。そう、僕は教師になった。今日が一学期最後の授業の日だから、いつもより早く家を出て行った。中学校に着いて、授業の準備を始めた。そうこうしている内に、「おはようございます。」と生徒たちが教室に入ってきた。僕は「おはよう。」と返事する。みんな集まったところで僕は教師という立場で授業を行った。だがあっという間に最後の授業が終わり、夏休みの宿題をあの時と同じくらいの量わたした。だが、

「なんでこんなに宿題の量が多いんですか。」

と一人の生徒が言いだした。他の生徒も

「そうだ、そうだ。」

と文句を言っている。そんな生徒たちに僕は話す。あの日のことを。